岡山市埋蔵文化財センター講座

遺跡見学会　「高島地域の遺跡・文化財」

令和７年３月 15 日（土）10：00 ～ 15：00

【予定コース】

（高島駅）→ 幡多廃寺跡 → 備前国庁跡 → 唐人塚古墳 → 賞田廃寺 → 浄土寺 →（高島駅）

はじめに

高島地域には、備前国庁跡をはじめとした律令期（７世紀後半～ 10 世紀頃）の遺跡が数多く分布しています。律令制により国を治めていた律令期には、中央政府から派遣されてきた国司が政務を行う施設（国庁）が高島地域にありました。国庁周辺には国の役所（国衙）がおかれ、国を治める政治都市である国府がつくられました。

今回は、高島地域を歩いてめぐりながら、備前国府関連遺跡のなかでも特に注目したい遺跡を中心に、この地域の遺跡や文化財について紹介します。

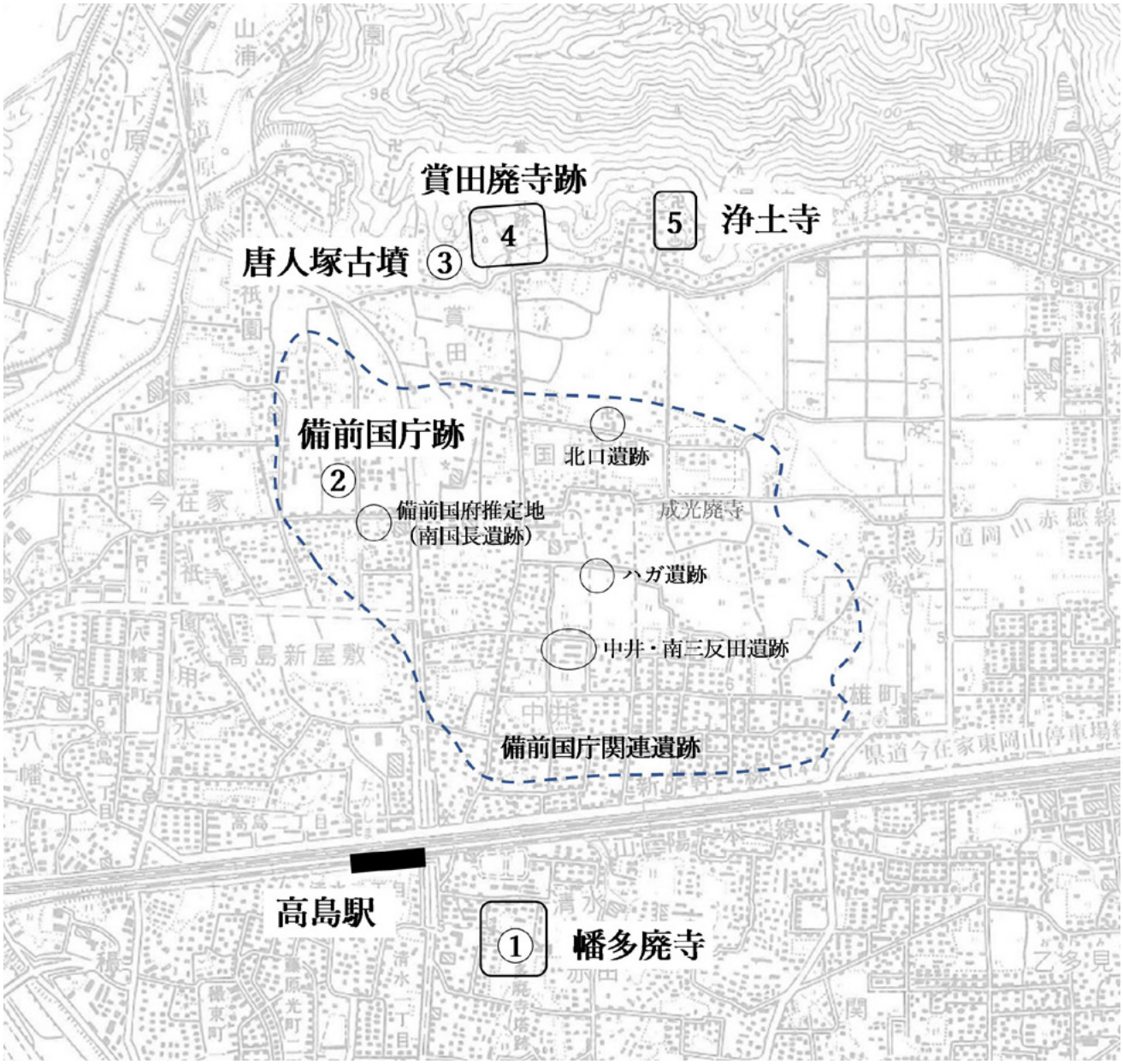

図１　高島地域の遺跡と文化財

①幡多廃寺・幡多廃寺塔跡【塔跡：国指定史跡】

現在は住宅地の中に塔心礎を残すのみとなっていますが、心礎は県下最大で、国の史跡に指定されています。1972 年～ 1973 年に発掘調査が行われましたが、水田開発により削平され、明確な伽藍配置は不明です。基礎地形等から、塔の他に金堂、講堂、門、回廊、築地があったと推測されています。幡多廃寺は白鳳期［７Ｃ後半頃］に本格的な造営により創建され、奈良時代前半［８Ｃ前半］に堂舎の建築と既存堂塔の基壇化粧の整備をもって一応の伽藍整備が完成したと考えられます。奈良時代末～平安時代初頭［８Ｃ末］には改築あるいは災害復旧のための改修工事が行われており、平安時代中頃に廃絶したと推定されています。また、平安時代後期の瓦窯跡（写真１）が２基確認されています。

三彩陶器や円面硯、土器、瓦などのほか、凝灰岩の石材も出土しており、賞田廃寺と同様に壇正積基壇の堂塔が存在したものと推定されています。また、軒瓦には賞田廃寺と同一文様で平城宮跡で出土する瓦とも同一文様のもの（図３、10）が確認されており、幡多廃寺の建立にも賞田廃寺と同氏の上道氏が関わっているとみられます。しかし、郷名「幡多」は「秦」であったとも考えられ、秦氏との関わりも気になるところです。

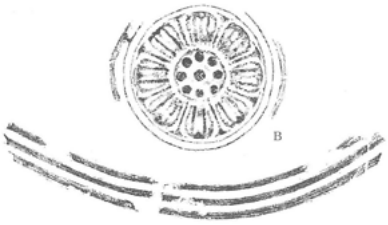

図２　創建期の軒瓦
（図出典：文献 4）

図３　賞田廃寺・平城宮と
同一文様の奈良時代前半の軒瓦
（図出典：文献 4）

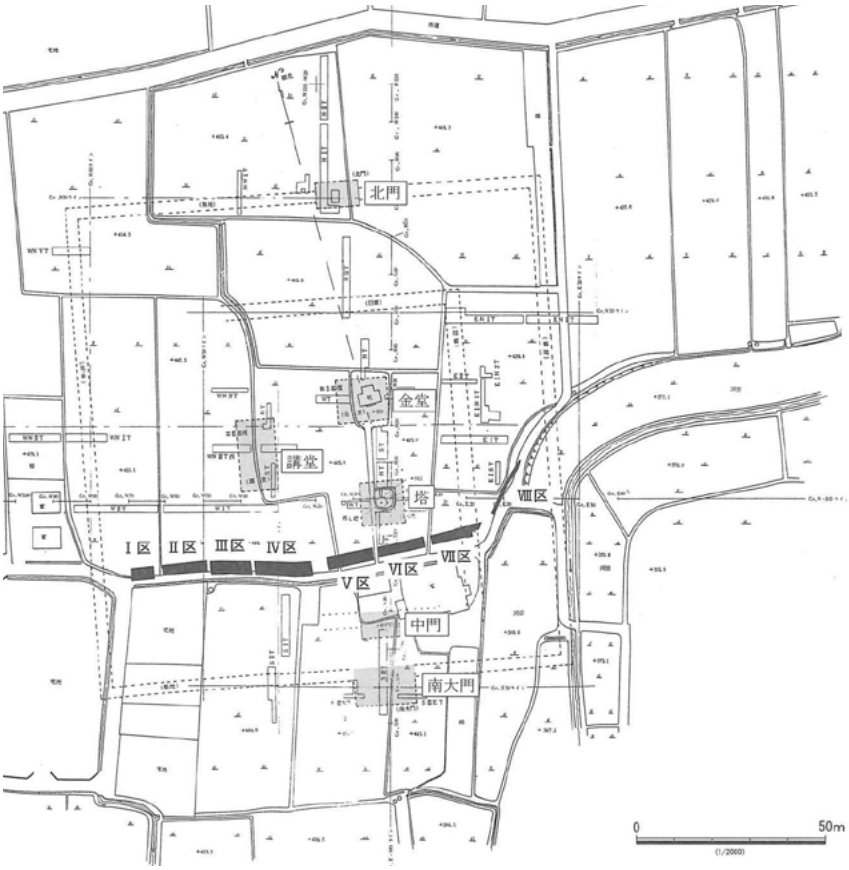

図４　想定伽藍配置と発掘調査区（図出典：文献 4）

写真１　平安時代後半の瓦窯
（図出典：文献 7）

②備前国庁跡【県指定史跡】

備前国の国府は岡山市中区国府市場を中心とした地域にあったと考えられています。遺構としては国庁の位置や構造は未だに不明ですが、この国長宮は、周囲に「北国長」・「国長」・「南国長」など国庁に通ずる地名が残っていることから、備前国府の中心と想定される地として昭和 34 年に岡山県の史跡に指定されました。

近年、南国長遺跡やハガ遺跡、南古市場遺跡など備前国府関連遺跡の発掘調査が行われ、国府市場周辺の地形や遺構などの様子が明らかになりつつあります。これらの調査結果によると、備前国府の中心地は想定されていた国長宮よりも少し東にずれ、国府市場東半に国庁が設けられていた可能性が色濃くなってきました。

③唐人塚古墳

巨石を用いて築かれた横穴式石室を有する古墳時代後期［７Ｃ］の古墳です。墳丘が大きく削平されており、本来の墳形は不明です。石室石材の積み方から、県下の巨石を用いた古墳の中では最も新しいものと考えられています。石室内の奥壁よりには、播磨産竜山石とされる刳抜式家形石棺[1)]の身と考えられる石棺が残っています。県下では同種の石棺が 12 例ほど確認されていますが、これらの中では最も大型の部類に属しています。

唐人塚古墳の被葬者については、巨石を用いた石室や、畿内を中心に分布する播磨産竜山石製の刳抜式石棺をもつことから、吉備の中枢であり畿内との関係が深い人物とみられ、郡名とも重なる上道氏とみられます。また、隣接する賞田廃寺との密接な関係性が窺え、被葬者と寺院建立者との関係を示す事例と考えられます。

1) **刳抜式家形石棺**…蓋を屋根形にし、身をくりぬいたもの（図５）。縄掛突起が蓋の傾斜面や身の側面につくものや、突起をもたないものがある。なかでも、播磨産竜山石製の刳抜式家形石棺は、特に畿内の中枢部で後期の後半・終末期の有力古墳に用いられる。

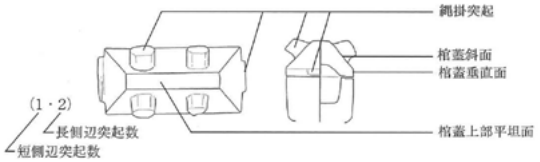

図５　刳抜式家形石棺
（図出典：文献）

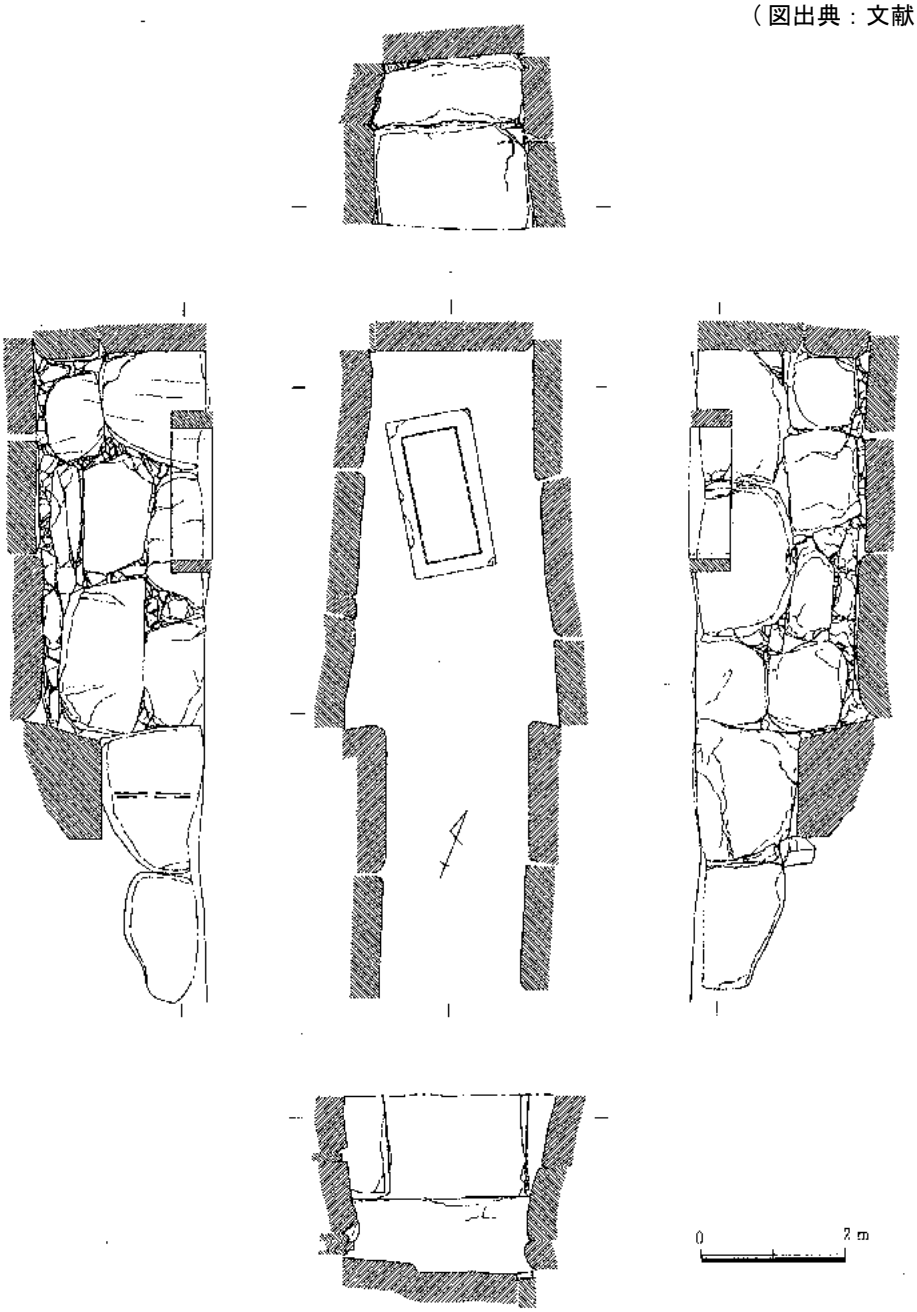

図６　唐人塚古墳の石室実測図（図出典：文献）

④賞田廃寺跡【国指定史跡】

備前国最古の寺院跡で、国の史跡に指定されています。1970年と2001～2003年に発掘調査が行われています。飛鳥期［７Ｃ前半］に創建された賞田廃寺は小さな建物でしたが、白鳳期［７Ｃ後半］に金堂が、奈良時代中頃［８Ｃ中頃］に東西の塔が造営され、金堂と東塔が接近した変則的な双塔式伽藍として整備されたとみられます。東西両塔の基壇には、地方寺院では珍しい凝灰岩製の壇正積基壇[2]が採用されており、当時の立派な姿が想像できます。また、平城宮と同一文様の軒瓦が出土しており、この瓦は幡多廃寺跡でも出土しています。

さらに、賞田廃寺跡の寺域が、上道氏の本拠地と想定される上道郡上道郷を占めることや、上道斐太都（正道）の栄達[3]の時期と壇正積基壇の東西両塔の造営時期が一致することから、賞田廃寺は上道氏の氏寺であると考えられます。

2) **壇正積基壇**…均一の大きさに加工した角石を規則的に積み上げて築く基壇。最も格式の高い基壇外装であり、都城や大寺で好んで採用された。

3) **上道斐太都の栄達**…橘奈良麻呂らによる謀反を藤原仲麻呂に密告した功績により一挙に15階昇進し従八位上から従四位下となり朝臣の姓を賜与された。仲麻呂政権下において地方豪族としては異例の抜擢を受けた。

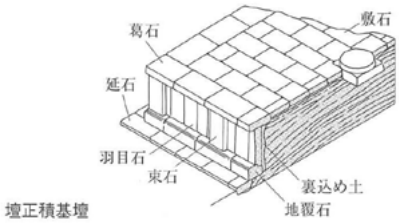

図８　壇正積基壇（図出典：文献 8）

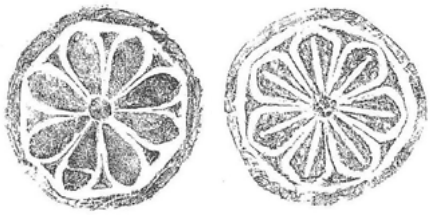

図９　創建期の軒丸瓦
（図出典：文献 3）

図 10　幡多廃寺・平城宮と同一文様の
奈良時代前半の軒瓦（図出典：文献 3）

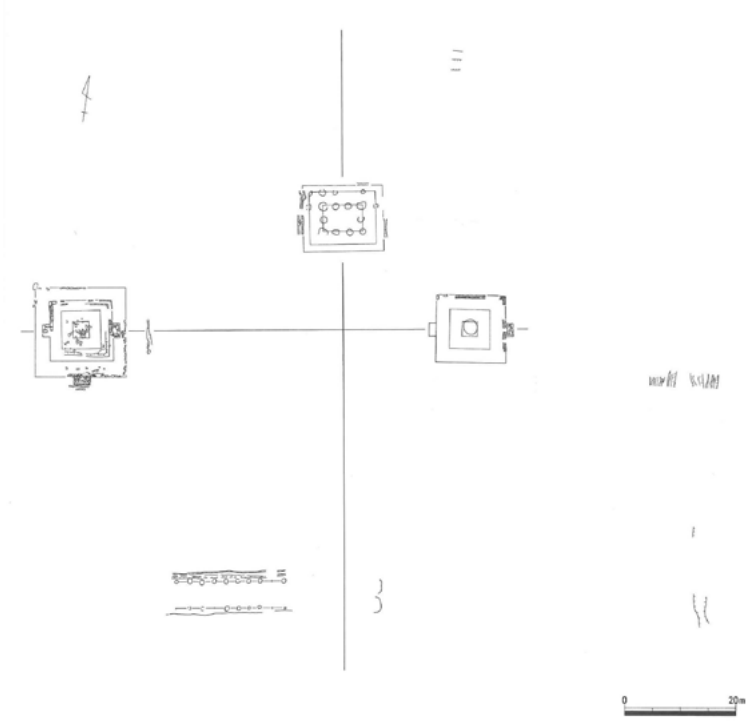

図７　賞田廃寺伽藍配置図（図出典：文献 3）

⑤浄土寺【県指定史跡】

備前四十八ヶ寺の一つで、岡山県の史跡に指定されています。奈良時代［８Ｃ］に創建されたと伝わる浄土寺は、鎌倉時代初頭［12Ｃ末］において、東大寺大勧進である俊乗坊重源の備前国における活動拠点となった寺でもあります。境内には、庶民の施療のために建てたとされる大湯屋跡が残っています。また、「浄土寺」の文字がある瓦や、東区瀬戸町万富にある万富東大寺瓦窯跡で焼かれたものである「東大寺」刻印瓦が境内から出土しており、重源との結びつきが深く感じられます。なお、現在の建物は江戸時代に建てられたものです。

【参考文献】1: 太田宏明 2011「家形石棺」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社、2: 岡山市遺跡調査団 1972『岡山市の文化財』第１集　岡山市遺跡調査団、 3: 扇崎由・高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会、 4: 草原孝典 2001「唐人塚古墳の測量調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999（平成 11）年度 岡山市教育委員会、 5: 草原孝典 2015『幡多廃寺－旧備前国上道郡所在の古代寺院の発掘調査報告－』岡山市教育委員会、 6: 水藤千代造編 1937/2000『高島村史』岡山市高島学区連合町内会、 7: 出宮徳尚ほか 1975『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団、 8: 文化庁文化財部記念物課・国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき　9: 湊哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院』吉備考古ライブラリィ 13　吉備人出版